

## イエナ論理学「形而上学」におけるヘーゲルの〈関係〉概念

竹村 喜一郎

はじめに

イエナ期の思索の過程の一つの総括として、ヘーゲルは一八〇四・五年に論理学「形而上学」「自然哲学」に関する浄書原稿を残している。<sup>(1)</sup>そこに展開されている論理学「形而上学」の体系構想、また体系を構成する内容の個別的部分が不十分なものとして彼自身によって放擲されたことは、一八〇八年五月二十日付のニートハンマー宛書簡で「イエナでは自分の論理学についてはほとんど土台を置いたことも詳細に講義したこともありません」と述べられていることから明らかである。<sup>(2)</sup>だがこの論理学「形而上学」部分は、単にヘーゲルの論理学の最初のまとまった構案を呈示しているという形式的理由からだけでなく、その内容がヘーゲル哲学の基本的立脚点を開示しているという実質的理由からも注目に値する。まず最初の理由について多少説明を加えるなら、ヘーゲルは一八〇一年秋イエナ大学に籍を置いて以来、毎学期「論理学と形而上学」に関わる内容を、そのものとしてであれ、全哲学体系の一部としてであれ、はたまた両部分一体化した思弁哲学としてであれ、講義題目として掲げている。<sup>(3)</sup>初期の場合、論理学と形而上学との関連、それぞれの機能に関する断片的な講義草稿が残されているにせよ、そこから実質的な構成と内容を読みとることは難しい。<sup>(4)</sup>だが一八〇四・五年の論理学「形而上学」は、出版を予定して書かれたと思われる浄書稿として残されているという経緯からして、それまでの思索内容を集大成したものとみなしうるのである。それではこの論理学「形而上学」に注目する第二の理由として挙げたヘーゲルの基本的立脚点とはどういうものか。ヘーゲルは一八〇一年の『フィヒテの哲学体系とシェリングの哲学体系との差異』（以下『差異』論文と略記する）以来、講義、論文等においてさまざまな形でカント、フィヒテをはじめとする同時代の哲学に対する批判を展開したにせよ、自らの

立場を固有の原理に基づいた体系として対置することはできなかった。一八〇四・五年の論理学「形而上学」は、哲学の最も原理的な領域でのヘーゲル自身のその時点での立場の展開であり、そこにはカントやフィヒテのみならず、「盟友」シェリングとも異なる立脚点が定礎されているのを見ることが出来る。それが〈関係 Beziehung〉概念であることは、次の一文から看取しうる。「だが自己」自身に同等なものは、実際には関係、一方のものの他方のものによる規定でなければならない」(GW 7.132)。ヘーゲルはこの主張により伝統的に哲学の根本原理とされてきた同一律・矛盾律の批判を企てているが、その槓杆が〈関係〉概念なのである。しかも関係という概念はこの箇所のみならず、相関関係 Verhältniss をも「〔項同士の〕差異ある関係」(GW 7.44)と捉え返す形で、論理学「形而上学」のあらゆる場面においてヘーゲル固有の見解の支えとなっている<sup>(5)</sup>。その意味でこの論理学「形而上学」におけるヘーゲルの基本的立脚点は、関係概念なのである。

だが問題はヘーゲルが関係概念を自己の立脚点としているということそのことにあるのではない。ヘーゲルが関係概念を立脚点としたことは、それに基づいて彼が認識了解、存在了解といった哲学の根本問題を根元的次元で転轍しようとしたことを意味する。それ故本論の直接的課題は、イエナ論理学「形而上学」においてヘーゲルが企図した哲学的思惟の転換の内実を見定めることにある。以下この課題を、第一にヘーゲルの哲学的課題意識を対自化し、第二に関係概念に定位する認識の理念を説明することを試み、第三に関係概念そのものの構造理解に即して存在了解の更新を確定し、第四にヘーゲル固有の哲学との関連においてイエナ論理学「形而上学」のもつ意味を検討するという手続きを介して、果たすことにしたい。

## 一 論理学「形而上学」における哲学的課題意識

どんなに新しいものといえども、既存のものの中で生を享け、それから養分を吸収することによってはじめて自己の存立を確立しうる。ヘーゲルの哲学といえども例外ではない。ここでは彼が伝統的な論理学と形而上学から形態と内容を借りながら、一八〇四・五年の論理学「形而上学」において独自の内容を展開しようとしたことを、その課題意識に即して対自化してみたい。

さてイエナ論理学「形而上学」は、表現が生硬な上に、恐らくその意想や構成方法を論じてあったと推測される冒頭部分が散佚し、全体として何を問題としているのか、容易には理解し難い。しかしながら、その主題が「認識(認識すること Erkennen)」にあることは、「哲学は自体

Ansich あるいは絶対的なものを考察する」(GW 7.133)とされ、その対象である「自体」が「認識は自体の理念であり、あるいは理念一般である」(GW 7.168)と規定されていることから判明する。哲学が「真なる知識とは何か」という問題を主要問題の一つとして展開されてきたかぎり、ヘーゲルの問題設定も伝統的問題圏の枠内にあるかに見える。だがここで確認されなければならないことは、ヘーゲルが認識を主題とする課題意識には、少くとも四つの点で哲学の伝統を超克しようとする志向性が内包されていることである。

まず第一に挙げられる伝統との対決点は、論理学と形而上学との区分に関わる。ヘーゲルの論理学「形而上学が、論理学を「哲学への導入部分」、形而上学を「本来の哲学」とする伝統的見解<sup>(6)</sup>と異なるものであることは、内容だけでなく、論理学と形而上学を一体的なものとする構成方式からも明らかである。まず内容が伝統的論理学および形而上学とは異別であることを確認するために、後論の便宜もかねてごく簡単にヘーゲルの構成を概観しよう。論理学は三部から成る。ヘーゲルは第一部「一重の関係」(die einfache Beziehung)において質・量・定量・無限性を論じ、一重の関係の本質が「真なる無限性」であることを指摘している。第二部「相関関係」(das Verhältniss)では一重の無限性の二重化として「存在の相関関係」(Verhältniss des Seins)と「思考の相関関係」(Verhältniss des Denkens)が論じられている。前者はカントの関係(Relation)のカテゴリーと同じく実体性・因果性・交互性を扱い、これに対して後者では通常の論理学の内容を成す概念・判断・推論が取上げられる。第三部「比例」(Proportion)は定義・分類・認識を内容とするが、これらはそれまで論じられたことを総体性の立場から総合するものとして展開されている。ところでヘーゲルは続く形而上学も論理学同様に三部構成にしている。第一部「基本的命題の体系としての認識」では、同一性あるいは矛盾の命題・第三者排除の命題・根拠の命題が、第二部「客体性の形而上学」では靈魂・世界・最高實在が、第三部「主体性の形而上学」では理論的自我あるいは意識・実践的自我・絶対精神(der absolute Geist)がそれぞれ論じられている。こうした概観からも論理学の内容が、主観的形式的思考法則としての論理学に限定されるのではなく、また形而上学も靈魂・世界・最高實在という伝統的テーマだけを扱うのではないことが明白である。更にヘーゲルにおける論理学と形而上学との関連が伝統哲学のそれと異なることは、両者が互いに他を前提し合う形で、両者の一体化を図る構成方式がとられている点に見うる。このことは、形而上学の最後で絶対精神が自己の始元に還帰するものとして次のように言われていることから論定できる。「精神は己れの最高の頂点において再び自己の最初にと、自己の始元 Anfang にと還り落ちるが、この始元は再びただこの始元であるにすぎず、一重な関係と対置されたものとしての無限性とに分離する無限性である」(GW 7.177)。この始元は、

精神の自己自身への関係が無限なものとされ、「無限なものは、論理学の第一部あるいは悟性の論理学と名づけられたもの以外の何ものでもない」(GW 7.175)と言われている以上、論理学の始元にほかならない。このような論理学「形而上学」の円環性からしてヘーゲルの構想においては伝統的区分は止揚されている<sup>(7)</sup>。それ故ヘーゲルは一八〇六年夏学期の講義題目にはこうした観点を徹底化して「思弁哲学あるいは論理学」を掲げることになる。

ヘーゲルの伝統哲学との対質の第二は、認識とその対象とを別のものとする認識論の基本構図に向けられている。すなわち彼は認識を問題にした断片において認識と認識されるものとの間に絶対的な区別を設定することを否定する。「なぜなら、我々が知 $\text{Erkennen}$ と認識を呼ぶのは、我々が認識とその対象とを区別しながら、しかしこの区別を止揚されたものとして、つまり対象を認識へと、もしくは認識を対象へと定立するかぎりだからである。しかし、この知において両者をひとつに定立することは偶然なことではなく、我々が認識と対象として区別した両者が端的にひとつであるのだから、絶対的なことなのである」(GW 7.346)。認識とその対象とを単に区別するだけでは知は成立しないこととするこの立場は、認識主体と認識客体とを二元的に切断する近代的な主観・客観図式によっては認識そのものが成立しないことに対する即事象的な捉え返しに基づく。このことは主観の産物とされるカント的な悟性概念「カテゴリー」に対する次の批判からも知られる。「同様に悟性概念と呼ばれるものは、関係の無限性であるが、その関係は何ものをも関係づけず、その両項がああ絶対的で相対的な両項でない関係としての無限性であり、純粋な単一性、完全に空虚な同一性、あるいはそれ自身における無である。そして自体的であるのはああ諸感覚、諸対象並びにこの概念、絶対的な相関関係であり、両者は、一つにしてまさに同じなのである。諸感覚あるいは諸対象の現象だけが客観的なものであり、同様に空虚な概念という思考物 *Gedankending* だけが主観的なものである。だがまさにそれがために前者の客観的なものも、後者の主観的なものも一つの無なのであり、そして自体は無限な相関関係だけなのである」(GW 7.51)。ここでヘーゲルが言おうとしているのは、カントのカテゴリーが主観の構成物であることによって、それによって結合されるものは真に客観的なものでもなく、真に主観的なものでもなく、そうした意味において結合されたものは無でしかなく、カテゴリーのみが絶対的なものとしてあるということである。内容的なことは後でみるとして、とりあえず言えばヘーゲルは主観と客観とを切断することなく、両者を真に関係づける新しい認識の理念を定立しているのである。

第三のヘーゲルの伝統哲学との対決は形而上学の内容そのものに関わる。ヘーゲルはたしかに形而上学の対象としての伝統的な二つのもの、霊

魂・世界・最高實在（神）を挙げている。だが彼はカントのようにそれらを物自体として認識の彼岸に追いやるのではないだけでなく、客観性の形而上学という低い段階の対象として扱い、更には内容そのものを変えている。彼は言う。「不死性と最高實在の彼岸のもとへの憧憬は、より低次の圏のうちへの精神の還り行きである。その理由は、精神が自己自身にあつて不死であり、そして最高實在だからである」（GW 7.173）。ヘーゲルは伝統的形而上学が対象とした魂の不死性なるものを、実体を生成・消滅するものと捉える立場から認めないだけでなく、最高實在は神という表象をも否認する。「最高實在は、しかしながら事実上は類 *Gattung* である」（*ebd.*）。とはいえ、類そのものもそれ自身で存立するものとは是認されないことによって、絶対的彼岸はヘーゲルによつては究極的には「モナドの内的なもの」（GW 7.170）に還元されてしまう。明らかにライプニッツを念頭に置いた形而上学批判は、ヘーゲル哲学をキリスト教神学の哲学的表現と規定したり、そのうちに伝統的形而上学への復位を指摘する見解に対する反証としてきわめて大きな意義を有する。ヘーゲルはたしかに絶対精神を形而上学の究極的位置においたが、それ自身伝統的なキリスト教の神などではない。「理論的精神一般として、それにとつて規定性そのものが絶対的規定性、無限性である實在化された実践的自我として、自我は絶対的精神なのである」（GW 7.165）。自らの普遍性を自覚した個別的である理論的自我が、自己の規定性を實現する実践的自我となり、規定性を實在化していることが絶対精神の内実なのである。この意味においてヘーゲルは、単に呼号するだけである実伝統的立場に安住している自称形而上学の破壊者とはちがって、真の形而上学の破壊者なのである。

ヘーゲルの伝統的哲学を止揚せんとする第四の志向性は、認識と存在とを区別することの排却にみられる。ヘーゲルが問題にする認識が単に主観的な思考の活動ではないことは、次のように言われるところから察知される。「他者への一切の關係から身をもぎ離したこの自体としての認識、その諸モメントそれ自体がもろもろの総体性であり、自己内に反照したものであるこの自体としての認識は、形式をその絶対的な具体化にまで構成したところの論理学の対象ではもはやなく、形而上学の対象である」（GW 7.124f.）。ここに言われていることは、論理学が認識の諸モメントとしての形式を総体性にまで構成すること、そして形而上学はそうした諸モメントを實在化することを主題とするということである。だが認識の實在化、すなわち認識諸形式の現實化とは、ヘーゲルにおいては、自己を対象とする認識が存在として現實化することにはかならない。彼はいう。「自体存在としての認識は、それが自己のうちで完結しているもの *Insichgeschlossenen* [sein] であることによって、絶対精神のうちにおいて實在化されている」（GW 7.165）。実践的自我が絶対的な規定性である無限性を實在化することによって絶対精神が成立すること

が認識の実在化なのである。ここには理論と実践との別という伝統的区分も止揚されているが、認識の実在化が認識と存在との同一化である以上、認識論と存在論とは一体化されている。認識論から切り離された存在論も、存在論から切り離された認識論も、それ自身としては無としてヘーゲルによっては否定されている。

さて以上にみた哲学の伝統の克服というヘーゲルの課題意識を支える立脚点が関係概念であることは、次のように彼が言うところから明らかである。「関係は一般に自体的であり、対置されたものどもは絶対的な必然性のうちにおいてある」(GW 7.158)。ここでいわれる「自体的」という語も絶対的という語と同義である。関係は絶対的であり、如何なるものも、それから脱しえず、自己に対置されたものを有せざるをえない。そのかぎり、論理学と形而上学、認識とその対象、彼岸と此岸、認識と存在、これらすべては自存しえない。こうしてヘーゲルは対置された両項が独立してあることの止揚を説く。だがこのような対自化のし方は未だ外在的である。ヘーゲル自身事柄そのものに即してどのように既存哲学の問題の所在をつきとめ、その克服を図ったか捉え返されなければならない。

## 二 認識の定位点と編成構造

一八〇四―五年の論理学・形而上学においてヘーゲルが定立した課題としての認識とは、「絶対的なものの真の認識」、すなわち「一なるものと多なるものとが一つのものであり、そして唯一こののみが絶対的であるはずだ、というただこのことが証示されるだけでなく、一なるものと多なるものそのものにあつて双方のもの一方のその他方とのへ一つであること *Einsein* もが定立されていることも証示されていること」(GW 7.35)である。ここではまずこのヘーゲルの認識の理念の成立経緯を探り、次にヘーゲルの認識の基本的定位点と絶対的なものの真の認識の編成構造を解明しよう。

一と多がそれぞれにおいて他方と一であることを証示することという認識の理念が、ヘーゲルのイェナ時代の思索過程に淵源することは、容易に取られる。なぜなら彼は一八〇二―三年に発表された論文「自然法の学問的取扱ひ方について」(以下自然法論文と略記する)において、絶対的なものを「差別的なものの同一性」と規定して、次のように言っているからである。「それ故絶対的なものは、無差別と相関関係との統一である。そして後者の相関関係とは二重化しているものであるから、絶対的なものの現象は、無差別と相関関係あるいは相対的同一性——そこ

では多が第一のもの、肯定的なものである——との統一として、そして無差別と相関関係——そこでは統一が第一にして肯定的なものである——との統一として規定される。前者が物理的自然であり、後者が人倫的自然である。(略) 実体は絶対的かつ無限である。無限性というこの述語のうちに神の自然の必然性あるいは神の自然の現象が含まれており、そしてこの必然性はまさにこの二重化している相関関係のうちで自己を実在性として表現する。両属性のいずれもがそれ自身実体を表現し、そして無限であり、あるいは無差別と相関関係との統一である。そして相関関係において、それら二自然の区別は、一方の相関関係においては多が、他方の相関関係においては一が、第一のものあるいは諸々の他のものに対して強調されたものである」(GW 4.433)。

とりあえず言えば、ここで言われる神の自然の両属性としての物理的自然(無差別と多が第一である相関関係との統一)と人倫的自然(無差別と一が第一である相関関係との統一)の規定をベースに、ヘーゲルは論理学・形而上学において存在の相関関係と思考の相関関係を展開し、両者の統一として比例を置いた、ということになる。したがって「絶対的なもの」の形式的規定は自然法論文と論理学・形而上学において同一である。だが看過しえないことは、絶対的なものの把握の様式には根本的な差異があることである。すなわち自然法論文において、次のようにヘーゲルは諸規定の統一を、カントおよびフィヒテのように判断に求めるのではなく、直観に求めている。「これに対して直観の統一は、一全体を構成する諸規定の無差別であり、隔別されかつ対置させられた規定として諸規定を固定することではなく、それらを総括しかつ客観化することである」(GW 4.439f.)。だが論理学・形而上学において絶対的なものを把握するものは認識であり、諸規定を総括するものは判断でも直観でもなく、推論である。「推論は自」のうちへと還帰した相関関係一般であり、存在と思考との相関関係の同一性である」(GW 7.95)。更に諸規定の客観化を行なうのは認識の実在化のプロセスとしての形而上学である。それではヘーゲルのこうした絶対的なものの把握・客観化に関する姿勢の推転はどのような認識論的モチーフと関連するのか。

認識に関する抽象的な議論に目を奪われることなく、ヘーゲルの認識に対する関心の所在を追跡するなら、それが具体的場面に定位していることが瞭然とする。ところでヘーゲルの認識に対する基本的な関心は、事物の規定をどのようになすべきかという認識の原理的問題に向けられている。そうした場面においてヘーゲルが事物の規定性を質に求めたことは、カントがカテゴリー表を量から始めたのに対して、自らの展開を質から始め、量による規定を次のように批判していることから明らかである。「一つの規定された事物の本性の洞察は、ただその事物の規定

性が規定性そのものとして認識されることにあるのであり、偶然的な、すなわち量的な規定性として認識されることにあるのではない」(GW 7.17)。カントは「すべての直観は外延的量である」という直観の公理を認識の出発点に置いた。<sup>(8)</sup>自然法論文でのヘーゲルの直観がカントの経験的直観と同一とは言えないが、ヘーゲルは論理学では規定性を質に求めることによって直観から絶対的なものを把握する権能を剝奪したとみてよい。

同時に留意すべきことは、上の量的規定性に対する批判が現象を量的差別として捉えることを説いたシェリングにも向けられていることである。再確認するまでもなく、シェリングは『我が哲学体系の叙述』(一八〇一年)において、絶対的なものを、有限者である「思惟する者」の捨象によって到達される「主観的なものと客観的なものの全体的無差別 Indifferenz」、そして現象の世界を「量的差別」と規定した。<sup>(9)</sup>ここでヘーゲルのシェリング批判の論点は二つある。その一つは、量的差別は「事実上何ら限界づけではない限界づけ」(GW 7.15)であって、それによって事物の真なる規定は可能ではないということである。こうした批判はシェリングが現象界ひいては有限者の存在を否定したことに向けられている。これに対してヘーゲルがいう事物の真なる規定性は「質的規定性」(GW 7.16)である。だがそれ自身ヘーゲルは事物そのものが自ら有すると説くのではなく、「対置(立) Gegensatz」(ebd.)あるいは「端的に他の規定性への関係のうちにおいてのみあるものとしてあること」(GW 7.39)と捉える。ここに質的規定性を対置＝関係とするヘーゲルの認識の原理を見定めうる。ヘーゲルのもう一つのシェリング批判の論点は、絶対者のみがあつて現象がないのであれば、実は絶対者そのものもなくなるということである。こうした把握は次のように表明されている。「自己同等性と規定性の双方は、事実上互いに他へと関係づけられて、そして一つのものとして定立されるなら、双方のいずれもがその他方を止揚する」(GW 7.132)。絶対者が  $A \parallel A$  で表現され、両項の双方が同一なら、 $A \parallel A$  によつては何も規定されないが故に双方ともにも無になるということである。ここに自己同等なものの「関係、一方のものの他方による規定」の必要性が語られることになる。結局絶対者が存立するためには現象そのものが質的区別を有するものとして存立しなければならない、というのがヘーゲルの主張である。ここには既にあらゆる牛が黒く見える夜という『精神現象学』でのシェリング批判が原理的に表明されているのである。

このような規定性に対する姿勢をみると、ヘーゲルの定位点が経験への徹底した内在にあることは明白である。このことはヒューム、カントの実体を「相違う、独立して存在する実体」と批判して次のように言うことのうちにも見うる。「経験はたしかに概念と現象とを結び合わせ



ることであり、換言すれば没交渉な諸実体、諸感覚、あるいはその他の欲するものを動員することであり、そのことによってそれら実体、感覚などは規定されたもの、ただ対置においてのみ存在するものどもになる」(GW 7.50)。対置あるいは関係による事物規定は、経験そのものが無意識裡に遂行していることなのだ、というのがこの文の意味である。

それでは対置あるいは関係を認識の原理とした場合、具体的な認識はどのような編成構造をもつのか。まず確認しなければならないことは、ヘーゲルが対置による規定を一つの事物に外的な形で可能であるとは考えないことである。このことは彼の考える真の無限性の規定が示している。つまりヘーゲルは対置が必ずあるものと他のものとの関係づけであるかぎり、関係づけられる両項は相互に他の項のうちににあることになる。と述べ、続けて次のように言う。「対置されたものは、しかしながらその対置されたものが自己に対置されたものうちにおいてのみあることによって、その自己に対置されたものうちにおいて自己を、ならびにこの他方のそれをも、それ自身で無化する」(GW 7.33)。かいつまんで言えば、関係づけられないものは規定性をもちえず、関係づけられて規定性をもつと、対置されたものうちに含まれることによって最初の自己の否定が生じ、反対物になる。だがそういった矛盾を含みながらそのものであることが無限性であり、事物の基本的存在様式だ、というのがヘーゲルの見解である。このような無限性の把握にみられる対置構造を前提するとき、一つのものの規定性は単に一つの他のものとの対置によって完成するのではなく、多くの他の規定性との対置によってのみ現実的なものになりうるとともに、そうすることによって互いに他の規定性を含み合うことによって一なるものと多なるものとが一つであることになるといふ事態が生ずる。

ところでこうした観点を押し進めるとき、規定性を把握することが認識であるから、認識はあらゆるものとの相互対置によってのみはじめて完成することになる。実際ヘーゲルが存在の相関関係および思考の相関関係として展開するものは、存在および思考それぞれに関わる規定性の総体であり、論理学の枠内で成立する認識とは、こうした相対的に区別された二つの総体的規定性の関係づけということになる。それ故ヘーゲルは論理学の末尾で言う。「認識はこのような仕方で、二重化された相関関係のうちに自己自身を分ち投げるとともに自己自身へと還帰しているところの實在化された無限性である」(GW 7.124)。この「實在化された無限性」は「総体性 Totalität」(ebd.)であることによってヘーゲルの認識の編成は総体性として構造化されるのである。

したがってまた絶対精神において実現することになる絶対的なものの認識も、人間諸個人を多としそこに関係を介して成立する相互の規定性

の相等性の把握という形態をとることになる。まず絶対的なもの、すなわち絶対的精神の認識の内容を構成する多が単なる多ではなく、人間諸個人であることをヘーゲルは次のように言う。「多は今や我々に対してある多ではなく、この我々にとってその多がそのような多であるその当の「我々」が今や我々の考察そのものの対象なのである」(GW 7.165)。したがって認識の実現あるいは真に絶対的なものの認識とは、こうした「我々」が相互に関係のうちにあることの捉え返しを介して成立する一と多、多と一が一つであることの覚識の現実化となる。だがここで注意すべきことは、ここでの認識の実在化が単なる観想あるいは予定調和ではないことである。このことは絶対精神の成立が精神の自己把握によるとされているにせよ、更にその前提として自己を自己の他なるものとして定立する自我あるいは主体の存在が挙げられていることから立言しうる。すなわちヘーゲルは言う。「精神は自己を概念把握する。なぜなら精神が自分を他のものにと関係づけられながら定立し、換言すれば自己自身を自己自身の他のものとして、無限なものとして定立し、そしてこうして自己自身に同等だからである」(GW 7.173)。他者との関係を自覚し、自己を自己の他のものとして定立する精神とは、私利的な自己維持を止揚した脱自的主体にほかならない。ヘーゲルが言う認識の実在化とは、こうした主体によって形成される共同性の現成なのである。

ここにみた認識の理念の意義について三点ほど摘記してみよう。まず第一にヘーゲルの思索の発展という観点からは、こうした認識の理念は、自然法論文における「神的自然」を前提した外在的な共同性の基礎づけに代えて、一と多の関係の内在的展開からする絶対精神としての「我々」の相互主観的論理的基礎づけたりえている。この「我々」が『精神現象学』(一八〇七年)における「我なる我々、我々なる我」の祖型であることは見やすい。上にみた認識の理念の第二の意義は、ヘーゲルが認識の基礎として展開した存在ないし思考の相関関係の内容にある。ヘーゲルは相関関係を「形式」と規定したにせよ、それはカントのカテゴリーのように単に主観的なものではなく、対置あるいは関係の構造からしてそこにおいて主観的なものと客観的なものとが相互に出会い他に転化する場として構成されている。一例だけ挙げるなら、カントが実体性を関係(Relation)のカテゴリーに含めながら現象的実体をも常住不変的なものと規定したのに対してヘーゲルは現実の事物の形態に应ずる形で実体の生成・消滅を説いている(vgl. GW 7.73)。この意味においてヘーゲルの形式は、現実との関係において展開されるものとして真の先験的論理学樹立の試みとみなしうるのである。最後に第三に指摘しうる意義は、ヘーゲルが認識を実践的能動的な営みとして捉え返していることである。通常認識は所与の対象を前提し、それを受容する観想的受動的活動と捉えられる。しかるにヘーゲルは認識を主観・客観関係という抽象

的枠組の中で問題にするのではなく、具体的質的規定を獲得することを求めて自らが形式と素材を造り出し、自己の正しさを証示する運動として展開している。そこには認識そのものを、自己否定を内包する発展過程とみる新しい理念を見うるのである。

### 三 関係の構造と存在了解の更新

ヘーゲルの課題意識の一つに認識論と存在論との統一というテーマがあった。それ自身存在了解そのものの更新の志向性の現われである。このことを以下関係そのものの構造の解明、また他の哲学者との対比により確認したい。

これまでそのものとして果たすことができなかった関係概念の検討を、特に論理学冒頭の質論に即して試みる。まず、これまで既に述べたことの簡単な再確認から始めよう。ヘーゲルの関係概念は「対置 *Gegensatz*」(GW 75)を基礎とする。その理由は規定性の本質が「端的に他方の規定性への関係のうちにおいてのみあること」(GW 739)であり、ある規定性と他の規定性が関係づけられることが「対置」だからである。すなわちあるものがそれ自身としてあること、諸規定の独立存在 *Fürsichsein* は「一重な関係」あるいは「単一性」であり、「質の概念」(GW 76)としての「実在性 *Realität*」であるが、これ自身はそれ自身では規定性たりえず、他のものとの対置において他の「否定 *Negation*」を介してはじめて規定を有しうるのである。以上が関係の基礎が対置となる所以である。

だがヘーゲルが関係概念の基礎を対置としたことによって彼の関係概念は、「異なったものの統一あるいは同一性<sup>(10)</sup>」という平板な関係の規定を凌駕する内実を獲得している。このことはヘーゲルが対置のうちに三つの次元であるものの非同一化と同一化が相即せざるをえない構造を截り出しているところに見うる。その第一の次元は自己同等性を確認するための対置あるいは「否定」は最初の「肯定的な単一性」(GW 79)である。「実在性」を存立させなくするということである。ヘーゲルは言う。「自己を自身へと関係づける否定は、自己から実在性を排斥する」(GW 76)。対置によって自己同等性を確認することによって最初の「肯定的な単一性」は自己に不同等なものになるが、同時に最初の肯定的な単一性からすれば対置によって成立する自己同等性は自己に不同等なものなのである。第二の次元は、対置によってあるものは自己同等性を確認するにせよ、同時に対置された他のものと同等になることによって却って自己に不同等になるというそれである。対置によって対置されたもの同士が相互に同等になることの論拠は次のように与えられる。「なぜなら、多なるものが多重的であればただ多重的に多なるものは、

単一性によって否定されており、単一性それ自体は、一つのそれだけ多重的な否定しつつあるもの、あるいは一つのそれだけ多重的なものなのだからである」(GW 7.101)。つまり相互に対置されるものは自己同等的であるためには相互に他を否定し合うだけの内実をもたねばならず、そのことによって却って相手と同一の内容をもつことになる。関係の構造としてはこうした事態をヘーゲルは次のように定式化する。「一つのものの一つの他への関係、——そしてこの一者も他者もこの関係は包括するが——両者ともこの関係の単一性のうちに含まれている」(GW 7.52)。このような関係構造の把握は、内的関係という類型に算入されよう<sup>(11)</sup>。こうした事実は質の場面では「限界 Grenze」における「實在性の無と否定の無」(GW 7.5)として定式化される。第三の次元は、以上の二つの次元が実は同一の事態であるので再度関係づけられ、そのことによってあるものの自己同等性が回復されるが、そのことによって関係づけられたものは、関係づけられる前の自己とは不同等になるという次元である。質の場面に帰れば、規定性は「實在性と否定性」(GW 7.5)つまり「諸質の無」と「諸質の存在」であるが、両者は同一の内容として排他的であることはできず、「自己」を自身へと関係づける一つの否定を止揚する」(GW 7.6)ことになる。そこに「総合 Synthese」、そこにおいて双方(實在性と否定性)が同時に存立している単一性あるいは實在的な質」(GW 7.6)が成立する。以上ヘーゲルの展開の略述にすぎないが、そこには常に同等なものが不同等なものであり、不同等なものであることが同等なものであるという論理展開が見られる。だがそれ自身事柄に外在的な思考の展開ではなく、究極的には自己を自己に関係づけることとしての自己同等性はそれ自身としては存立不可能であるという認識を出発点とし、そこから対置が必然的であることの帰結として成立している。このかぎりヘーゲルは異なるものそのものの自己同一性を問う次元から関係を問題化し、それ故また単に異なるものの同一性を靜止的に把えることなく、関係の動的構造を開披しているといえよう。

ところでこのような関係の構造の一般的定式化がいうところの真なる無限性であることも既に見た。「絶対的矛盾」「絶対的対置、無限性」(GW 7.33)はすべて同じものであり、それゆえあるものが「自分自身の反対物」になるという意味での「弁証法」(GW 7.5)もここには含まれている。しかしここではこれらの事柄そのものに直接立ち入ることなく、関係概念と関連する問題に三点に限って言及したい。まず一つは、対置を関係の基礎とすることは、予めあらゆるものが無差別的に一体化した全体としての無限性を前提することにはならないということである。ヘーゲルの真無限性が関係づけられる二項があつてはじめて成立するものであることは、彼の対置の本質規定が語っている。「対置の本質は、自己自身を止揚するという絶対的な運動 Unruhe である」(GW 7.34)。対置されたものの相互排斥—相互同一化—自己還帰のプロセスが真無限であ

り、有限なものの本性を無限、すなわち「自らのあることのうちにおいて自己」を止揚すること」(GW 7.33)と規定するものもこうした観点からである。したがってここでは『差異』論文で「しかし反省は理性としては単に否定する能力であるが故に絶対者に関係しているものであって、またこの関係によつてのみ理性である」(GW 4.16)と言われるような絶対者を前提する立場、またそこで表明される関係概念、理性概念をヘーゲルは克服しているのである。第二の点は、ヘーゲルにおいて規定性と反省 Reflexion は一体的に捉えられているということである。彼は言う。「反省なしの規定性は特殊なものではなく、その規定性は無であろう。同様に反省は自己自身だけでは空虚である。なぜなら反省は対置から、すなわち規定性から還つて来てあるものとしてのみあるからである」(GW 7.77)。したがってヘーゲルにおいて自己関係などという抽象的な自己反省としての無限性は否定されているのである。第三はヘーゲルの二重否定の内容である。ヘーゲルは無限性の過程を肯定 affirmatio になる二重否定 duplicis negationis と定式化しているが、その内容は「自らの絶対的不等において自己自身に等しいこと」(GW 7.34)と規定されているように、通常解されるような二重否定≡単純肯定ではない。抑々彼は自己同一性としての単純肯定そのものを認めないし、上でみた反省の規定を含むものとしてしか肯定はないのである。

それでは次にヘーゲルの関係概念を存在論の次元で捉え返した場合、そこどのような存在了解が開示されるのか。存在論の局面において単純化すれば個物の存立に関して個物がそれ自身としてあるという実体主義の立場と関係によつてあるという関係主義の立場とが異立する。そこに認識の問題を加えれば、認識に関しても同一の態度をとる上記の二つに、個物自身は自己同一性をもつが認識的规定には関係を要するとする中間的立場が成立する。ヘーゲルが認識と存在との同一を唱えたことは、関係主義の観点からであった。たしかに彼にも個体の自存性を認めるかのような叙述が見られる。例えば自我の一つの在り方を「一重であることそのもの」と規定し、更に「自己を自己自身へと関係づけること」(GW 7.180)と規定し直す場合がそれである。だがこうした規定すら、直ちに反対物に転化されるものであることは、関係の構造が語っていた。より積極的に言えば、ヘーゲルは個体を「純粋な点、しかも互いに交叉しあっている無限な数の直線から成る点」(GW 7.151)と規定する。いささか比喩的すぎるが、こうした把握の内実は、なんであれ一つのものが他のものに関わりなくそれ自身で存立しようとする見解を一つの思考物として斥けるところに与えられている。「なぜならこの一つのものはいささかも諸規定性の無差別 Indifferenz ではなく、それらの諸規定性の本質は、ただ他の諸規定性への関係のうちにあるということであり、そしてこれらの諸規定性の関係あるいは諸規定性相互の差異がそれら諸

規定性の直接的な否定的な単一性であり、諸規定性の本質であり、この本質は、端的に諸規定性の外部にあるのでもなければ、諸規定性に没交渉なのでもなく」(GW 7:99 傍点引用者)。一つの個体は一つの規定性であるにせよ、他の諸規定性との関係にあつて他の諸規定性を己れのうち含み、それらを抹消するのではない。これが「無数の線から成る点」の意味である。したがって個体は他の諸規定性同様他の諸規定性への関係を己れの本質とするのである。規定性が関係である以上個体の本質はあらゆる諸関係となる。人間は社会的諸関係の総体であるというテーゼが後年ある男によって掲げられ、有名になった。この男の限界は関係を社会的なものに限ったことである。ヘーゲルは根源的な次元で、あらゆる個体の本質をあらゆる諸関係の総体とする見解を定立しているのである。

しかしあらゆるものを関係から捉える観点が妥当かという問題は立てられうる。一つは絶海の孤島に独居する人間のように関係から離れた個体なり個体はあるのではないかという問である。こうした問に対するヘーゲルの答えは次のようになる。「だが個別的なものの無関心性の本質は、否定から由来していること、反省されていることであるから(略)、個別的なものは事実否定されたものへと関係づけられているということである」(GW 7:156)。関係を拒否すること自身拒否されるものと関係づけられている。絶海の孤島に独居することも、関係という観点からは、別の暮らし方を否定することとして否定されたものと関係づけられていることになる。もう一つ立てられる問題は、関係があつても、個別的なものはどうして存立しうるのかという問題である。意識が個体の現実性を担保するという考え方が成り立つ。だがそれには、意識をもたないものは個体ではなくなるのかという反問が成立しうる。ヘーゲルは自我の場合でも意識を自我の基体とは考えない。「自我は一つの規定性ではあるが、この規定性がいわば意識をもたらずのである」(GW 7:159)。意識があるから自我があるという把握はいわば近代哲学共通の大前提である。だがヘーゲルはそれを逆転する。では個体はどうヘーゲルから捉え返されるのか。それは既に掲げた引用の傍点部分に示されている。個体は否定的単一性であり、それ自身は諸規定性相互の差異である。だが注意すべきことは、あらかじめヘーゲルが否定的単一性を前提するのではなく、規定性の差異が否定的単一性を成立させると述べていることである。そこにヘーゲルの関係主義的存在了解の核心を見うるのである。

最後にヘーゲルの関係主義の準位を先行哲学者との関連において測定しておこう。関係主義的存在了解は学史的にはライブニッツに濫觴を有する。だが彼の場合関係理論は最終的に「神の思惟」に還元されたが故に関係主義としての徹底を欠いた。<sup>(12)</sup>ヘーゲルは最高実在をモナド、しかも最高のモナドではない諸モナドに還元したが故にライブニッツを克服したと言える。たしかにヘーゲルは絶対的なものの真の認識を「ただ唯

一の实体 Eine Substanz がある」との証明」(GW 7.35) というように、実体を肯定している。だがこの实体がライブニッツ的な神ではないことは、今一度確認するなら、この实体が絶対精神であり、しかもこれ自体いわゆる实体ではなく、「我々にとって、すなわち認識、自己自身に到来しつつある精神にとって」(GW 7.176)と言われているように「我々」がいたりつくものである以上、「我々」によって構成される真なる共同性なのである。このような意味でヘーゲルは関係主義的存在了解を徹底かつ更新したのである。それとともにここで確認した实体把握が同時に自然法論文にみられるスピノザ主義の残滓の克服をも物語っていることが留意されなければならない。形而上学においてヘーゲルが最高實在の属性を「自己維持するものあるいは思考と存在あるいは延長との対置」(GW 7.153)と規定していることは、ヘーゲルがなおスピノザおよびシェリングの影響下にあることを証しているかに見える。だが究極的にはそれ自身真実ではないとされるにせよ、靈魂に対して与えられる「实体はむしろ主体である」(GW 7.145)という規定の徹底として最高實在そのものが否定され、絶対精神の成立が語られている以上、スピノザ的实体は克服されているのである。

ところで今みた『精神現象学』の基本モチーフを端的に先取りしている主体概念は通例ヘーゲルの準拠枠のフィヒテへの転移の所産と解されている。<sup>(13)</sup> フィヒテの自我の概念について検討することは暫く措くとして、ヘーゲルが規定性を関係から説いたことにはフィヒテのインパクトが認められる。フィヒテは『全知識学の基礎』において「一般に関係 Relation によるほか規定根拠は存在しえない」<sup>(14)</sup>と言っているからである。だがフィヒテが関係による規定に消極的意義しか認めていないことを閑却することはできない。つまりフィヒテは関係による規定に対して、「絶対的規定」が存在すること説く。「あるものは自己自身によって規定されているかぎりにおいてのみ規定されているのである」<sup>(15)</sup>。自己自身による規定を説くかぎり、フィヒテは実体主義を固持しているのである。それでは自我の概念についてはどうか。後年ヘーゲルは『哲学史講義』においてフィヒテに対する次のような評価を下している。「自我が対立においてのみ端的に規定され、ただ意識と自己意識としてののみ規定されるのを見るが、この意識と自己意識はそれ以上に出ることはなく、ましてや精神となることはない」(W 20.408)。こうしたフィヒテ批判は既にイェナ論理学・形而上学において確立していたとみてよい。なぜならそこでヘーゲルは精神は対立(置)のうちにある同一化の契機を介してのみ成立することを次のように語っているからである。「精神的なものとは、自己自身に同等なものが、その自己自身に同等なものの他なるもののうちにおいて自己を見出すということである」(GW 7.174)。対置のうちに成立する同一性を足場にヘーゲルはあくまでもフィヒテとの差異

を自覚的に堅持したといえる。実体主義的な視点からヘーゲルを解するかぎり、フィヒテとヘーゲルとの差はごくわずかなものに映ずる。だが存在了解そのものの境域に降り立つとき両者は対極に立つ。このことはヘーゲル自身が最も鋭く意識していたことといつてよい。

#### 四 ヘーゲル哲学の原基としての関係概念

ヘーゲル固有の哲学的原理が一応の確立をみたのは、一八〇七年刊行の『精神現象学』においてであると言えよう。ここでは一八〇四・五年の論理学「形而上学」と『精神現象学』の立脚点の差異の所在を確認し、またヘーゲル固有の論理学成立に際するイェナ論理学「形而上学」の位置を討究する。

一八〇四・五年の論理学「形而上学」が如何にヘーゲルの思惟の基本的立脚点を展開しているにせよ、そこには間もなく執筆が開始される『精神現象学』との重大な差異があることは無視しえない。それは「純粹概念」(GW 9.22)の未成立である。ヘーゲルは『精神現象学』の序文の最後の部分で自己の学の体系を「概念の自己運動」(GW 9.48)と規定している。ここで言う概念が「純粹概念」としてヘーゲル固有の原理であることは次の文が如実に語っている。「概念は、自らを生成として示す対象の固有の自己であることによって、自己は運動せずに属性を担っている静止的主語ではなく、自分で運動し、自分の諸規定を自己のうちに取戻すところの概念である」(GW 9.42)。通常概念は主観的なものと考えられるが、ヘーゲルは概念と対象とを一体的なものと捉え、そこから概念を対象の規定性をとりまとめる対象自身の運動として定立する。ところで一八〇四・五年の論理学「形而上学」にはこうした概念の構造から逆照するなら少くとも二つの問題が認められる。一つはそこにおいても弁証法的運動を介する概念とその実在化が語られ、「内容の本性は、したがって認識の内容と同一である」(GW 7.122)とさえ言われるにせよ、そうした観点は「比例」における定義―分類―認識という運動の構造分析という形式性の枠内にとどまり、形而上学領域はともかく、論理学領域においては実質性を欠いていることである。無論この概念の運動の諸モメントが一体化される形でヘーゲル固有の概念が成立すると言え、対象の固有の自己として概念を定立することはできていないのである。これと関連したもう一つの問題は数学的認識の本性に対する洞察の欠如である。『精神現象学』で確固として語られる、数学的認識が定在の生成しか示さないのに対して哲学的認識が「定在としての定在の生成」と「本質の生成、事柄の内的本性の生成」との双方を含む(GW 9.32)、という観点は、論理学「形而上学」では確立されていない。そこにはたしかに数



学の証明の不十分さに対する不満の表明が見られるが (vgl. GW 7.117)、「数学的認識の本性に対する洞察が欠如していることは、認識の展開方式がまったくピタゴラスの定理の証明の仕方に依拠して説明されている」とから知られる (vgl. GW 7.151)。ヘーゲルは一八〇五・六年度の冬学期以降連続四学期数学を講義題目に掲げているが、<sup>(16)</sup> 哲学的認識の固有性に対する十全な覚識の成立はこの講義に負うものと推測される。

とはいえ、ヘーゲルが固有の概念を自己の哲学の原理として『精神現象学』ではじめて確立したからといってそのことによって関係概念が棄却されたわけではないことは確認しておかなければならない。たしかにヘーゲルは『精神現象学』において表立っては関係について論じていない。だが彼の叙述の根底に関係概念があることは、必然性や運命を「存在として直観された絶対的な純粹概念」、「その業が個別態の無だけをもたらず、単純で空虚な、しかし止むこともなく妨げられることもない関係」(GW 9.200)と定式化していることから確言しうる。そこでヘーゲルは関係概念を純粹概念とするだけでなく、統一、区別とともにカテゴリーと規定し、またその機能を必然性として個別態を覆滅すること位置しているかぎり、関係概念そのものは『精神現象学』においても最も根源的で、最も重要な原理として位置づけられているのである。

それでは、イエナ論理学・形而上学は一八二二年から刊行されるヘーゲル固有の『論理学』に対してどのような位置を有するのか。まず予備的に確認しておきたいことは、ヘーゲルが「学の体系第一部」たる『精神現象学』の序文で体系の後続する部分として「論理学ないし思弁哲学」(GW 9.30)を挙げているにせよ、この「論理学ないし思弁哲学」が直ちに一八二二年からの『論理学』と同一の構成・内容をもったものとは即断しえないことである。このことはヘーゲルがニュルンベルクのギムナジウムで行なった二つのタイプの論理学、すなわち一八〇八―一〇年の「上級クラスのための哲学的エンチクロペディー」の論理学と一八一〇―一一年の「中級クラスのための論理学」を比較することによって推知される。今詳細に言及することはできないが、後者がほぼ固有の論理学と同じ形態をとるのに対し (vgl. W 4.62-203)、前者は第一部存在論的論理学 (1 存在 2 本質 3 現実性)、第二部主観的論理学 (1 概念 2 判断 3 推論)、第三部理念論 (1 生命の理念 2 認識の理念 3 絶対的理念または知識) という構成になっている (vgl. W 4.11-33)。『精神現象学』掲筆時のヘーゲルが構想していた「論理学ないし思弁哲学」は恐らくこれに近いものであったと思われる。しかしここで問題にしたいことは構成そのものの問題ではない。一八〇八年の論理学から一八一〇年後半の論理学への移行には構成に関する立場の変化が主たる要因として認められるが、一八〇四―五年の論理学・形而上学から一八〇八年の論理学への移行には、構成上のみならず、論理学そのものに対する態度の変化が見られる。そこにイエナ論理学・形而上学の内包する問題性がヘー

ゲル自身によって自覚されたことの証左を見うるのである。

ではイエナ論理学・形而上学の問題とは何か。結論的に言ってそこには単一性としての始元が結果の還帰であるという円環的体系性が認められるにせよ、その過程が一と多の関係づけと非関係づけの過程として展開されたかぎり、個々の規定性は固有の構造をもつことなく、常に無限性としての単一性のうちに解消されてしまうということである。こうした問題性は、ヘーゲルが掲げる始元そのものの規定から言いうる。彼は形而上学部分の冒頭において回顧的に言う。「論理学は自己自身に同等な認識としての単一性を以て始まったのである」(GW 7.129)。この単一性が無限性として内容の展開過程において常に反復されるものであることは、後年の論理学の冒頭部分を想起せしめる次のような記述からも明らかである。「無あるいは空虚性は純粋な存在に同等であり、この存在は、まさに空虚性であり、そして無と空虚性の双方は、そのために直接それら自身においてあるものあるいは規定されたものの対置を有し、そしてまさにそのためにそれら双方は真の本質ではなく、それら自身が対置の両項であり、そして無あるいは存在、空虚性一般は、ただ自己自身の反対物として、規定性としてのみあるにすぎず、そしてこの規定性は同様に自己自身の他のもの、あるいは無である」(GW 7.331)。この絶対的矛盾としての無限性が「規定されたものの唯一の實在性」(ibid.)であり、したがってこの論理構造は質と量の展開をも貫徹している。だがこのことによって奇妙なことに、質と量は相互に同一の内容と構造を有し、ヘーゲル自らが意図したシェリング的量的差別による規定に対する批判としては実効性をもてなくなるのである。つまり質が實在性―否定―限界というカテゴリーで展開されながら実質的には一―多―総体性(全体性)という量の内容と同一になり、質と量の質的差異は消失してしまうのである。だがこうしたカテゴリー構成は、ヘーゲル自身のモチーフの必然的帰結だったといってもよい。なぜなら彼自身が意図した「ただ唯一の実体だけがあることの証明」は、自然法論文で表明された「無差別と相関係との統一」という問題意識に発するものとして、一と多の関係に定位する論理構造によってのみ達成されうると考えられたからである。あるいはそこに「多を一のうちに表現する」というライブニッツのモナド論の呪縛の強さを認めうるかもしれない。しかしあくまで質と量の規定性のちがいを論理的に構造化しえないかぎりカテゴリーの展開は内容の展開になりえない。ヘーゲルがイエナ論理学・形而上学の刊行を断念した理由の少くとも一つはここにあると思念される。

結果解釈的に言えば、ヘーゲルがこうした問題性を解決するためにとった道は『精神現象学』において表明される「ものごとの内的な生命とこの生命の定在の自己運動」(GW 9.37)という観点を論理学にも貫徹することであった。こうした観点からする論理学の構想が現実的にいつ

の時点でヘーゲルにおいて定着したかは、資料が欠如しているために特定できない。しかし、一八〇八年の論理学がそうした構想に基づいていることはたしかである。そうならば翻つてイエナ論理学・形而上学はヘーゲルの中で全く無意義として放棄されたことにはならない。なぜならそこで展開されたあるものとの対置から質を構成し直し、そこから導出される向自存在を基礎に一と多の関係としての量を構成するという展開方法によって一八〇八年の論理学は成立しているからである。更にその場合にも定在の項で規定性が「他者への関係」(W 413)として説かれているように関係概念は枢要な位置を与えられているのである。この意味ではイエナ論理学・形而上学で確立された関係主義は、『精神現象学』において精練され、一八〇八年の論理学を経由して『論理学』において全面的な展開をみていると予料することができるのである。

## むすび

ヘーゲルがイエナ時代に存在了解ひいては思考の革命を試み、その暫定的青写真を一八〇四・五年の論理学・形而上学として書き残したことは余り知られていない。そのため多くのヘーゲル研究者を含めて、ヘーゲルの公刊された著作のみを相手にする読者は、そこにありもしない神秘主義を幻視したり、思弁の影法師にたじろいたり、果ては自分の背丈に合わせてヘーゲルを切り刻んだりする愚を犯している。ヘーゲルがイエナ論理学・形而上学に構成上からも内容上からも限界を認めたことはたしかである。だが彼がそこで展開した存在了解の基本視座が終生変わるものでなかったことは次の一文が如実に示している。「現存在するものはすべて相關関係をなしており、この相關関係があらゆる現存在の真実である。したがって現存在するものは抽象的にそれ自身で存在するのではなく、他のもののうちにのみ在るのである。しかしそれは他のもののうちで自己への関係であり、相關関係は自己への関係と他者との統一なのである」(Enzy. § 135 Zusatz W 8.267)。あらゆるものは他のうちで自己への関係と他者への関係であるなら、他者から切り離された自己関係などがあるはずがない。この意味で関係を原理とする存在了解を明示的に打ちだした一八〇四・五年の論理学・形而上学は、ヘーゲル哲学の発展過程における標燈のみならず、思考の歴史における標燈でもあるのである。

## 註

引用について——略符号は以下のテキストを示し、その後に巻数およびページ数を付す。

GW = Georg Wilhelm Friedrich Hegel Gesamelte Werke. In Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft. Hrsg. von der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften. Hamburg 1964ff.

W=G. W. F. Hegel Werke in zwanzig Bänden. hrsg. von E. Moldenhauer und K. M. Michel. Frankfurt am Main 1970.

- (1) 執筆年代決定は Heinz Kimmerte, Zur Chronologie von Hegels Jenaer Schriften. In: Hegel-Studien, Bd. 4, hrsg. von F. Nicolin und O. Pöggeler, Bonn 1967, SS. 162-167, に従ふ。
- (2) Briefe von und an Hegel. hrsg. von J. Hoffmeister. Hamburg 1952 ff. Bd. 1, S. 230. ところへ「ほとんど」は全否定ではなく部分否定を看過してはならない。本論が着目するのは、ヘーゲル自身によつて否定やれていない部分は何か、とつてつゞである。
- (3) Vgl. Dokumente zu Hegels Jenaer Dozententätigkeit (1801-1807), hrsg. von H. Kimmerte, In: Hegel-Studien, Bd. 4, S. 53 ff.
- (4) Vgl. Manfred Baum / Kurt Meist. Durch Philosophie Leben lernen. In: Hegel-Studien, Bd. 12, hrsg. von F. Nicolin und O. Pöggeler, Bonn 1977, SS. 52-57.
- (5) Kevin Wall, Relation in Hegel, Washington 1983 は『精神現象学』以降の関係概念を扱つてゐるが、イエナ論理学・形而上学は視野に収めてゐない。ホーレンツは関係意識の関連について論じてゐるが、関係そのものを主題としてゐない。Vgl. Rolf P. Horstmann, Über das Verhältnis von Metaphysik der Subjektivität und Philosophie der Subjektivität in Hegels Jenaer Schriften. In: Hegel-Studien / Beiheft 20, Hegel in Jena, hrsg. von D. Henrich und K. Düsing, Bonn 1980, S. 185. ハリスの場合、相関関係を重視し、関係をほとんど無視してゐるが、むしろ私見で、ヘーゲルの比重を逆転してゐる。 Cf. H. S. Harris, Hegels Development—Night Thoughts (Jena 1801-1806) —Oxford 1983, p. 344, 384.
- (6) ヘーゲル自身イエナ初期において、つづいた区分に便宜的に従つてゐることは、註(4)で挙げた論文から窺える。
- (7) トレーデは、論理学と形而上学をあくまでも区別されたものとする立場から両者を一体的に捉えることに反対してゐる。Vgl. Johann Heinrich Trede, Hegels Frühe Logik (1801-1803/4). In: Hegel-Studien, Bd. 7, hrsg. von F. Nicolin und O. Pöggeler, Bonn 1970, S. 164. だがヘーゲルが両者を伝統的な意義に付して区別してゐることを、自由体無題である。
- (8) Immanuel Kant, Kritik der reinen Vernunft, B. 202.
- (9) Vgl. F. W. J. Schelling, Darstellung meines System der Philosophie, In: Schelling Ausgewählte Werke, Schriften von 1801-1804, Darmstadt 1976, S. 10, 19.
- (10) Béla Weissmahr, Ontologie, Stuttgart 1985, S. 134.
- (11) 関係概念の類型化については、ベントンの次のものが参考になる。Günter Patzig, Relation, In: Handbuch philosophischer Grundbegriffe, 4. hrsg. von H. Krings, H. M. Baumgartner und C. Wild, München 1973, SS. 1220-1231.
- (12) Vgl. Gottfried Martin, Allgemeine Metaphysik, Berlin 1965, S. 82.
- (13) 代表的なもので、Klaus Düsing, Das Problem der Subjektivität in Hegels Logik, Bonn 1976, S. 143.
- (14) Johann Gottlob Fichte, Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre (1794), In: Fichtes Werke Bd. I, hrsg. von I. H. Fichte, Berlin 1971, S. 198.
- (15) Fichte, Ibid., S. 318.
- (16) (9) を参照せよ。

# Hegels Begriff ›Beziehung‹ in Jenaer Logik–Metaphysik

Kiichirō TAKEMURA

哲学・思想論集第十六号

Im vorliegenden Aufsatz versucht ich, die Bedeutsamkeit vom Begriff ›Beziehung‹ in Hegels Logik und Metaphysik von 1804/5 zu beleuchten. In dieser Logik–Metaphysik bezweckt Hegel Überwindung der traditionellen Philosophie, welche auf der Dichotomie von Logik und Metaphysik, Erkennen und sein Gegenstand, Diesseits und Jenseits, Erkenntnis und Sein beruht. Dabei begründet er sich auf dem Begriff ›Beziehung‹.

Im Bereich der Erkennen handelt es sich um das Problem, wie die Sache bestimmt wird. Hegel hält für wahrhafte Bestimmtheit nicht eine quantitative, welche Kant und Schelling als die Erkenntnisprinzip der Erscheinende ansehen, sondern nur eine qualitative, welche allein durch den Gegensatz oder die Beziehung entsteht. Auf dieser Konzeption der Erkenntnis konstruiert er sowohl die Formen, welche Identische von Subjektivem und Objektivem statt Kantische subjektiven Kategorien sind, als auch die neue Idee, daß Erkennen in Zusammenfassung der totalen Bestimmtheiten liegt.

Nun heißt das von Hegel abgezielte Erkennen den Erweis, daß an dem Einen und Vielen selbst das Einssein eines jeden mit dem andern gesetzt ist, oder daß nur Eine Substanz ist. Hegel löst diese Aufgabe dadurch, daß er die Struktur der Beziehung durchschaut, in welcher die Bezogene oder Entgegengesetzte sich gegenseitig in Beziehung aufeinander aufheben.

Aus dieser Auffassung der Beziehung erhellt, daß Hegel kein substanzialistische Seinsverständnis aufnimmt, das meint, daß alles, was ist, von und für sich selbst ist, sondern daß er das relationistische vorzieht, das sich auf dem Standpunkt stellt, daß es nur die Relationen gibt. Weil Eine Substanz, die Hegel setzt, in der Tat der absolute Geist als „Wir“ ist, hat er an der Gründlichkeit Leibniz und Fichte übertreffend die Erneuerung von Seinsverständnis erfüllt.

Der Aufbau und einige Bestandteile der Logik–Metaphysik von 1804/5 waren zwar von Hegel selbst zurückgenommen, aber Beziehungsbegriff nebst das relationistische Seinsverständnis bleibt der Urbasis der Hegelschen Philosophie auch in „Phänomenologie des Geistes“ und „Wissenschaft der Logik“.